

Title	インタビューにおける表情表出 : 中国人と日本人の比較
Author(s)	王, 愛東; 米谷, 淳
Citation	対人社会心理学研究. 2008, 8, p. 97-102
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/6762
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

インタビューにおける表情表出

—中国人と日本人の比較—

王 愛東(神戸大学大学院国際文化学研究所)

米谷 淳(神戸大学大学院教育推進機構)

本研究の目的は、中国人と日本人のインタビュー中の顔の動きを比較することにより、対人場面での表情表出に及ぼす社会的文化的要因(性差、文化差)を検討することにある。インタビューでは中国人大学生 50 名(男性 25 名、女性 25 名)と日本人男子大学生 35 名がポジティブ感情について語り、そのときの顔の動きをビデオ撮影した。表情分析の結果を比較した結果、中国人は女性が男性より微笑を含む表情の表出が多いこと、中国人の男性は日本人の男性より表情表出回数が多いが、1 回あたりの表情表出時間が短く、微笑を含まない表情の表出が多いことが見出された。この結果は、先行研究(趙, 2002)を支持するものである。討議では、本研究の知見を日本人(森下, 2002)、タイ人(Patama, 2002)を対象に行ったインタビュー法による実験の結果と比較し、共通性と相違点について議論した。

キーワード: 表情表出、インタビュー、中国人、日本人、性差

問題

Furnham & Bochner(1986)は、社会的に有能な人間として異文化に適応していくためには、その文化における社会的スキルを理解することが重要であると主張している。表情表出・認識スキルは、社会的知能の大きな部分を占める(Archer, 1988)。本研究は、中国人の社会的スキルとしての表情表出に焦点を当て、日本人とどのような違いがあるかを実験的に検討しようとするものである。実験の説明の前に、表情表出についての考え方や中国人の表示規則に関する先行研究について述べておく。

表情表出について

表情すなわち顔の動きは、感情表出だけをしているのではない。感情を隠したりごまかしたりするのも用いられる。Saarni & Weber(1999)は、12 歳の子どもが感情を隠したりごまかしたりするのに顔の表情を作る、すなわち表示規則(display rules)を活用できると述べている。Carroll & Russell(1997)は、典型的な市井の人々の生活を描いたハリウッド映画の感情表現場面を分析した結果に基づき、日常生活で見られる表情が Ekman & Friesen(1975)の定義した基本表情と異なっていると主張する。人前で示す顔の動きは感情によって無条件に引き起こされるものではなく、むしろ意識的・無意識的につくられ、表示されるひとつの社会的行動である。この意味で表情は顔の感情表出というより、むしろ顔の表情表出(facial display)といえる。

中国人の表示規則

表情表出に社会文化的要因が強く働いていることは、これまでの表情研究で示されてきた(e.g., Ekman & Friesen, 1975; Fridlund, 1994; Matsumoto, 1996)。表情表出の文化差は、異文化コミュニケーションの障害の原

因となる。中国人と日本人の顔つきは見分けがつかないが、表示規則に違いはないのであろうか。

中国は、長期にわたって封建文化と伝統的な道徳に深く影響されてきた。孔子曰「巧言令色鮮し仁」。この意味は、口先上手で、表情を他人に好かれるようにする人は、大体善い人ではないということである。こうした格言に代表される儒教的な行為規範と道徳基準は、中国人に喜びと怒りを顔に出さないように情緒を抑制することを強調している。そのため中国人は、対人コミュニケーションにおいて内向的であり、思想や感情を表に出さない(孟, 2005)。

一方、小泉八雲(1977)が「日本人の微笑」、柳田国男(1979)が「女の咲顔」で力説した悲しみや困惑の表示としての微笑に代表されるように、日本人は悲しみなどのネガティブな感情の表出を隠蔽する特有の表示規則をもっている(米谷・瀧上, 1994)。

趙(2002)は、表示規則の文化差を調べるため、日本人と中国人に質問紙法調査を行った。その結果、「公的状況において、日本人はネガティブな感情抑制規則があるのに対して、中国人はポジティブな感情抑制規則が存在することが示唆された。」(p.89)と述べている。それでは、対人場面において、中国人と日本人の表情表出ほどの程度異なっているだろうか。実際に、中国人の対人場面における顔の動きを撮影・分析し、質問紙調査で得られた知見を確かめる必要があると考えられる。

表情撮影法

従来、顔の表情の研究に用いられてきた代表的な撮影法は、感情教示法、動作教示法、誘発刺激法の 3 つである。感情教示法は、感情語を表情表出者に提示し、その感情を喚起させ、表出された表情を撮影する。動作教示法は、表情表出者に指示し、顔の特定の部位を動かして

表情を撮影する。誘発刺激法は、誘発刺激材料を提示し、その際表出された表情を撮影する。

しかし、これらの方法はどれも対人場面ではない。日常的なコミュニケーション場面における表情表出を検討するには、対人場面という条件が必要不可欠である。この条件を満たす有力な方法として、インタビュー法がある(森下, 2002)。インタビュー法は、日常生活における感情や表情について回答者が語っている様子をビデオ撮影するものである。インタビューの最初に自己紹介をすることもある。森下・趙・米谷(2002)は、インタビュー法を用いて中国人の表情を撮影・分析し、日本人との違いを見出した。しかし、実験に参加した中国人は22名(男性9名、女性13名)であり、データ数は十分とは言えない。また、森下他(2002)は、主に怒りに類する感情を分析しており、ポジティブな感情についての検討はほとんどなされていない。われわれは、森下他(2002)を足がかりとして、中国人のポジティブな感情と表情を検討する。本論文では、その研究プロジェクトの一環として行ったインタビュー法による実験の結果を報告し、同様の手続きでなされた日本人についての研究(森下, 2002)、及びタイ人についての研究(Patama, 2002)による知見と比較しながら、表情表出における社会文化的要因について考察する。

実験

目的

インタビュー法による実験を行い、対人場面における表情表出について中国人と日本人の比較を行う。

方法

実験協力者 中国人大学生50名(男性25名、女性25名)¹⁾、及び日本人大学生35名(男性35名)²⁾に協力していただいた。中国人の実験は、大連市にある理工系大学の会議室で行った。日本人の実験は、神戸市にある総合大学の実験室で行った。

手続き 感情と表情をテーマとしたインタビューを行い、その中でみられる回答者の表情をデジタルビデオカメラで撮影した。具体的に、以下の4つの部分に分けて行った。

- ①自己紹介(約2分)
- ②感情についてのインタビュー(約13分)
- ③喜びについてのインタビュー(約10分)
- ④感情指示による表情表出(約4分)

実験協力者が入室すると、インタビュアー³⁾は挨拶し、実験協力者にインタビュアーと対面して着席させた。インタビュアーは実験協力者に実験目的を説明し、同意書にサインを求めた。次に、実験協力者の正面から頭部と上半身をビデオ撮影することの了承を得た上で、実験協力者の顔が、ビデオカメラに収まる位置に調整してから撮影を

開始した。

インタビューの流れは以下の通りである。インタビュアーは、「好きな食べ物、趣味、出身地、自分の生活について、いろいろ自己紹介してください。時間は2分間程度です。」と教示し、実験協力者に自己紹介してもらった。次に、「あなたは日頃感じた感情がどれくらいありますか。出来るだけ挙げてください。」と質問し、日頃感じる感情を列挙してもらった。次に、列挙された感情について順に、「いつ、どんな場面でその感情を感じましたか。その感情を感じたときはどんな行動をしましたか。」と質問した。すべての感情について回答後、喜びの感情についていくつかの質問をし、実験協力者に感情想起を促しながら体験談を語ってもらった。その後、感情指示法による表情撮影を行った。なお本論文では、自己紹介(①)と感情指示による表情撮影(④)については扱わない。

結果・考察

インタビュー中の表情表出は、森下(2002)と同様の方法で分析を行った。まず、撮影されたビデオを再生して、表情表出がみられたシーンを同定した。次に、それぞれの表情表出シーンについて、開始から終了までの時間を秒単位で測定し、表情表出シーンでみられた表情をFACS(Ekman & Friesen, 1978)によりコーディングした。さらに、表出される表情を、(A)微笑み、(B)微笑に他の表情筋が運動した表情、(C)A、Bどちらにも属さない表情の3タイプに分けて出現率を求めた。

Table 1に、表情表出の回数、総時間、表情表出1回あたりの時間、表情表出の種類数について、中国人男女、及び日本人男性の平均値を示す。Table 2は、タイプ別の表情表出回数の平均値を示す。表情表出の種類数についてはFACSによるコーディングの結果アクション・ユニット(AU)の組合せが他と異なるものを1種類として数えた。

Table 1 インタビュー中の表情表出の回数、時間、種類数の平均値

対象	人数	回数	総時間(秒)	1回あたりの時間(秒)	種類数
中国人男性	25	98.9	154.5	1.6	5.5
中国人女性	25	99.8	187.4	1.9	6.5
日本人男性	35	76.8	187.0	2.5	6.1

Table 2 タイプ別の表情表出回数の平均値

対象	A	B	C
中国人男性	28.9	7.5	62.5
中国人女性	34.4	16.2	48.8
日本人男性	29.7	8.0	39.4

中国人の男女差について *t* 検定により検討したところ、Bタイプの表出回数が女性が男性より有意に多いことがわ

かった($t=2.32, df=48, p<.05$)。表情表出の種類数については、有意傾向であった($t=1.99, df=48, p<.10$)。中国人男性と日本人男性の差異についても t 検定による検討を行った結果、表出回数($t=2.55, df=58, p<.05$)、表情表出1回当たりの時間($t=4.84, df=58, p<.001$)、Cタイプの表出回数($t=3.24, df=58, p<.01$)の違いが有意であった。すなわち、中国人男性は日本人男性より表出回数が多く、表情表出1回当たりの時間が短く、Cタイプの表出回数が多いことがわかった。

Figure 1に、中国人男女のBタイプの表情の内訳を示す。Bタイプは微笑(頬上げ(6) + 口角上げ(12)、Duchene Smileと呼ばれる。以下DSと略す。)と他の顔の動きからなる表情である。Bタイプに含まれる主な表情(DS + うなずき, DS + 左を見る(61))の表出回数は、中国人女性が中国人男性の2倍近くあったが、Mann-WhitneyのU検定の結果、どれについても有意差は認められなかった。

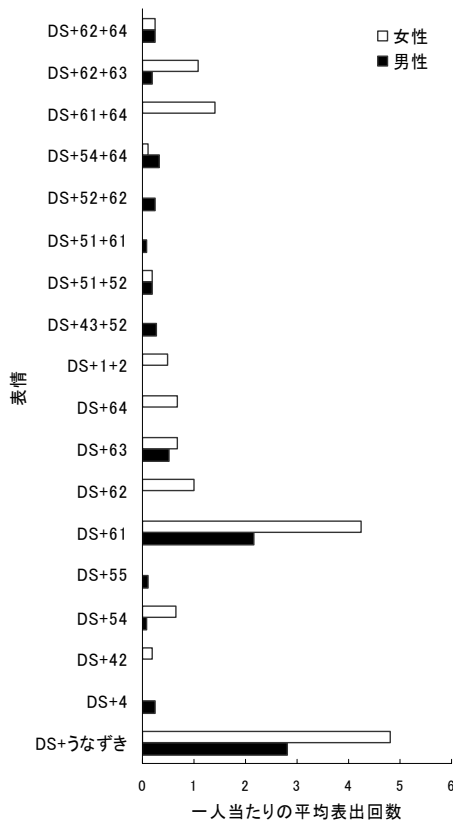


Figure 1 Bタイプの顔の動き(中国人)

註 DS(典型的な微笑:頬上げ+口角上げ)、1+2: 眉上げ、4: 眉下げ、43: 目を閉じる、51~55: 頭部を左右上下前に動かす、61~64: (眼球運動)左右上下を見る。

Figure 2に、中国人男性と日本人男性のCタイプの表情の内訳を示す。Cタイプに含まれる主要な表情(うなずき、1 + 2、4)は、中国人男性が日本人男性より表出回数

が多かったが、Mann-WhitneyのU検定で有意差が認められたのはAU4(眉下げ)のみであった($U=288, p<.05$)。

これらの結果より、インタビュー中の表情表出について中国人の男女差、及び中国人と日本人に違いがあることが確かめられた。中国人では、インタビュー中の表情表出の種類、のべ回数、総時間、1回あたりの表出時間について、男女差は認められなかった。また、純粋な微笑、及び微笑を含まない表情の表出回数についても男女差は認められなかったが、微笑と他の表情を組合せた表情の表出回数は、女性が男性より多いことがわかった。また、中国人男性が日本人男性より表情表出回数も多く、表情表出1回あたりの時間が長く、微笑を含まない表情の表出回数が多いことがわかった。さらに、性差、文化差のみられた顔の動きのタイプについて、詳しく調べたところ、主な顔の動きのパターンについて同様の性差・文化差があることが確認された。

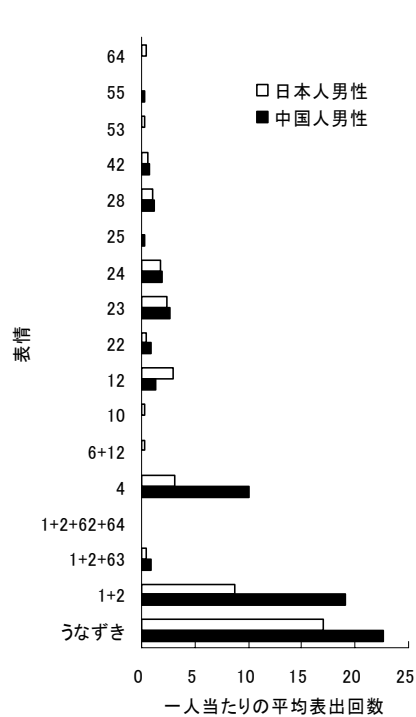


Figure 2 Cタイプの顔の動き

註 1+2: 眉上げ、4: 眉下げ、6: 頬上げ、10: 上唇を引き上げる、12: 口角上げ、22: 唇を突き出す、23: 唇をすぼめる、24: 唇を押し付ける、25: 唇を離す、28: 唇を吸い込む、42: 目を細める、53・55: 頭部を上・前に動かす、64: 下を見る。

討議

文化差について

中国人と日本人のインタビュー中の表情表出の違いを基に文化差について論じる。「日本人の微笑」は、表情

の文化差を示す代表例として紹介されてきた(米谷, 1998)。一方 Klineberg(1938)は、文学作品の比較を通して、中国人が欧米人になく様式で怒りを表出・表現することを見出した。また、社会構築説の感情研究者は、社会的役割としての感情が文化固有のものであることを示す例として、中国人の怒りを挙げている(Cornelius, 1996)。これらは、日本人と中国人の間に表情表出の違いが存在することを示唆している。しかしながら、趙(2002)以前にそれを実証的に検討したものは、見当たらない。

趙(2002)は、表示規則の日に比較をするため、日本人社会人 35 名(男性 17 名、女性 18 名)と中国人社会人 35 名(男性 17 名、女性 18 名)に対して質問紙調査を行い、公的状況と私的状況における喜び、悲しみ、怒り、恐れ、驚き、嫌悪の 6 つの感情表出の程度について評定させた。その結果、どの感情についても、日本人、中国人ともに公的状況よりも私的状況において、より強く表出することがわかった。すなわち、どちらの文化も公的状況において、感情表出を抑制する方向に表示規則が働くことが示唆された。次に、私的状況と公的状況に分けて文化差を検討したところ、私的状況ではどの感情も表出の強さが近い値を示していたのに対し、公的状況では喜び、怒り、恐れについて文化差が有意であった。喜びと恐れについては日本人が中国人よりも強く表出する一方、怒りは中国人が日本人よりも強く表出することがわかった。次に、日本人、中国人のそれぞれについて性差を検討したところ、喜び、悲しみ、恐れ、驚きの 4 つについて、私的状況では女性が男性よりも強く表出することがわかった。また、私的場面における悲しみの表出については、性別と文化との交互作用が有意であった。すなわち、日本人は性差(女性 > 男性)が大きく、中国人はあまりないことがわかった。

本研究では、男子大学生について中国人と日本人の表情表出を比較した。その結果、趙(2002)が質問紙調査で得た知見が部分的に支持された。すなわち、インタビュー中に、中国人男性が日本人男性よりもネガティブな感情をよく表出する傾向にあることが示唆された。

性差について

性差については、従来、女性が男性より感情表現が豊かであると言われている。Tannen(1990)によれば、それは男女間の「文化差」によって生じるという。すなわち、女性は人間関係において調和を重視し、相手と親密な関係を築こうとして、微笑みを特に頻繁に表出するが、男性は会話を情報収集の場と考え、自分の意思を率直に伝えようとするために、あまりニヤニヤした表情を好ましくないと考えるからだという。Kling & Gordon(1998)が欧米人を対象に行った表情実験の結果は、ポジティブ・ネガティブの如何を問わずそうした見方を支持するものであった。

また、森下(2002)が行った日本人についての表情実験

でも、これを支持する結果が得られている。森下(2002)は、日本人大学生男女各 50 名を対象にインタビュー法による表情撮影を行い、表情分析の結果を比較した。その結果、女性は男性より表情表出の総時間、1 分あたりの表出回数が多く、表情の種類は少なかった。

一方、Patama(2002)が行ったタイ人についての表情実験から、異なる結果が得られている。Patama(2002)は、タイ人 32 名(男性 10 名、女性 22 名)を対象に、同様の表情撮影と分析を行った。その結果、1 分あたりの表情表出回数、表情表出の種類数に有意な性差は認められなかった。

それでは中国人についてはどうだろうか。今回の実験の結果、中国人では女性が男性より微笑みを含む表情を表出する回数が多いことが示唆された。なお、表情の種類数は統計的には有意差はみられなかったものの、女性が男性より多い傾向にあった。森下他(2002)が中国人 32 名を対象に行った研究では、表情表出の回数、種類数とも性差は見られなかった。また、微笑みを含む表情の表出回数においても性差は認められなかった。しかしながら、表情表出の種類数は男性が平均 17.5 種類、女性が平均 20.2 種類であり、差は有意ではなかったものの、今回と同様の傾向であった。森下他(2002)の実験は、北京市内の広告会社の社員が対象である一方、今回の実験協力者は大連市の大学に通う大学生であり、年齢は後者が低い。また、聞き手はどちらも女性であったが、後者の方が若く、しかも実験協力者とすぐに打ち解けて明るく話し出した。一方、前者の聞き手は部外者であり、実験中、緊張して硬い表情であった。さらに、後者ではインタビューの後半において、喜びについての質問をした。このことが、結果の違いを生じさせたと考えられる。聞き手、対象者の年齢やインタビュー内容が表情表出にどのような影響を及ぼすかについては、さらに検討する必要があるが、今回得られた結果を中国人大学生の一般的傾向とみなすことはある程度可能であると考えられる。

したがって、女性が男性よりポジティブな表情が豊かであるという点において、中国人は欧米人や日本人と共通していると言ってもよいであろう。なお、趙(2002)が示唆するように、中国人は日本人より性差が小さいのかもしれないが、さらにデータ数を増やせば、ネガティブな表情(Cタイプ)は、日本人と同様、性差が有意となることも考えられる。今後、日本人女子大学生の十分な数の実験協力者を得て日本人の性差を検討するとともに、中国人のデータを増やして今回得た知見を確かめ、さらに性差、及び性別と文化の交互作用や表情表出の時系列的特徴について検討していきたい。

引用文献

- Archer, D. (1980). *How to Expand your S.I.Q. (Social Intelligence Quotient)*. M Evans & Co. (工藤 力・市村英次(訳) (1988). ボディ・ランゲージ解読法 誠信書房)
- Carroll, J. M., & Russell, J. A. (1995). Facial expressions in Hollywood's portrayal of emotion. *Journal of Personality and Social Psychology*, 72, 164-176.
- Cornelius, R. (1996). *The Science of Emotion: Research and Tradition in the Psychology of Emotions*. New Jersey: Prentice-Hall, Inc. (斉藤 勇(訳) (1999). 感情の科学 —心理学は感情をどこまで理解できたか— 誠信書房)
- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1975). *Unmasking the Face*. Prentice-Hall, Inc. (工藤 力(訳編) (1987). 表情分析入門 —表情に隠された意味をさぐる— 誠信書房)
- Ekman, P., & Friesen, W. V. (1978). *The facial action coding system: A technique for the measurement of facial movement*. Palo Alto, Calif.: Consulting Psychologists Press.
- Fridlund, A. J. (1994). *Human Facial Expression: An Evolutionary View*. San Diego: Academic Press.
- Furnham, A., & Bochner, S. (1986). *Culture shock: Psychological reactions to unfamiliar environments*. London: Methuen.
- Klineberg, O. (1938). Emotional expression in Chinese literature. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 33, 517-520.
- Kling, A. M., & Gordon, A. H. (1998). Sex Differences in Emotion: Expression, Experience, and Physiology. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 686-703.
- 小泉八雲 (1977). 日本人の微笑 平川祐弘(訳) 小泉八雲作品集 2 —随筆と評論— 河出書房新社 pp.66-96.
- 米谷 淳 (1998). 対人関係と表情表出 糸魚川直祐・南 徹弘(編) サルとヒトのエソロジー 培風館 pp. 211-220.
- 米谷 淳・瀧上凱令 (1994). 日米の TV ドラマを用いた表情識別実験 国際文化学研究, 3, 29-541.
- Matsumoto, D. (1996) *Unmasking Japan: Myths and Realities about the Emotions of the Japanese*. California: Stanford University Press. (マツモト, D.・工藤 力(訳) (1996). 日本人の感情世界 誠信書房)
- 孟 昭兰 (2005). 情緒心理学 北京大学出版社
- 森下朝日 (2002). インタビュー中に見られる表情表出 国際文化学, 6, 43-60.
- 森下朝日・趙 特雷・米谷 淳 (2002). 中国人の表情に関する研究 —インタビュー中の表情表出— 信学技報, HCS2002-1, 25-30.
- Patama, S. (2002). タイ人のスマイル 神戸大学大学院総合人間科学研究科修士論文 (未公開).
- Saarni, C., & Weber, H. (1999). Emotional displays and dissemblance in childhood implications for self-presentation. In P. Phillipot., R. S. Feldman., & E. J. Coats.(Eds.), *The Social Context of Nonverbal Behavior*. Cambridge University Press. pp. 71-105.
- Tannen, D. (1990). *You Just Don't Understand: Women and Men in Conversation*. New York: Morrow.
- 柳田国男 (1979). 女の咲顔 —不幸なる芸術・笑の本願— 岩波文庫 pp.111-123.
- 趙 特雷 (2002). 表示規則の日中比較研究 国際文化学, 6, 91-103.

註

- 1) 実験に協力した中国人大学生は、中国大連市にある理工系大学の学生であった。インタビュー中に年齢を尋ねたが、回答は任意としたので、実験協力者全員の年齢を知ることができなかった。なお、年齢を答えた学生は 18 歳～20 歳であった。
- 2) 実験に協力した日本人大学生は、1～4年次の学部生であった。インタビューでは年齢を尋ねなかったため、年齢は不明である。なお、日本人女子大学生については 3 名しか協力が得られなかったため、分析対象から除外した。
- 3) インタビュアーは 30 歳代の中国東北地方出身の中国人女性であり、実験に協力した中国人留学生とは初対面であった。

Facial display during interview: Comparison between Chinese and Japanese

Aidong WANG (*Graduate School of Intercultural Studies, Kobe University*)

Kiyoshi MAIYA (*Institute for Promotion of Higher Education, Kobe University*)

The purpose of this study was to investigate into socio-cultural factors (gender differences and cultural differences) in facial display in interpersonal situation by the comparison between Chinese males and Chinese females, and between Chinese males and Japanese males during interview. Fifty Chinese students (twenty-five males and twenty-five females) and thirty-five male Japanese students participated in the interview. Their facial movements were recorded by video camera. The results of analyses of their facial movements indicated that the Chinese females more frequently showed facial displays including Duchene smile (AU6 + 12) and another facial movements, and that the Japanese males more frequently showed facial movements, the mean duration of a sequence of facial movement of the Japanese males was longer than the Chinese males, and the Japanese males more frequently showed facial displays excluding Duchene smile. The results were considered to support Zhou(2002)'s finding that Japanese tend to suppress facial expressions of negative feelings in public situations more likely than Chinese. In the discussion, the similarity and the difference among Chinese, Japanese, and Thai are discussed.

Keyword: facial displays, interview, Chinese, Japanese, sex difference.